

Wingless

さてこの曲は『伴奏のみのパートであるAメロ』と『メインメロディーであるBメロ』の2つブロックによって構成されています。同じブロックの繰り返しが多いので演奏は楽かもしれませんが。ただしどれも同じような調子で演奏すると感じが出ないので、タメや音の強弱を上手く使って、それぞれ雰囲気を変えるのがポイントです。

(楽譜の指番号の対応:人差し指=1 中指=2 薬指=3 小指=4 開放弦=0 親指=thumb)

A1

<1> 2拍目は5弦の開放弦からのハンマリングです。この時6弦1f(フレット)を押さえる人差し指が5弦に触れないよう気を付けます。3拍目ウラの2弦1fの押弦(おしげん)は、指先で6弦1fを押さえたまま指を寝かし押さえます。

B

…本曲ではこのBパートが合計4回繰り返されます。つまりBパートさえ出来ればこっちのものです

<2> 6弦1fを押さえるのに人差し指ではなく親指を使っています。これによって人差し指が自由に使えるようになり、【1・2弦の開放弦から1fへ押弦】といったフレーズを弾くのがとても楽になります。ただ親指での押弦は慣れないと難しく、手の大きさなども関係してくるので絶対に無理をしてはいけません。親指に痛みを感じたら直ちに練習中止です。無理せずに練習していたら、ある日突然楽に押さえられることもあるので気長にいきましょう。どうしても無理だったら人差し指で6弦1fを押弦しても大丈夫です。(これに限ったことではないのですが、楽譜の指番号はあくまで目安になります。自分のもっと弾きやすい押さえ方をどんどん見つけていくのが良いと思います)

<3> 2弦1fの音は基本的に開放弦からのハンマリングで出します。この際、人差し指を強く叩きつけてはダメです。メロディーが消え入るような雰囲気を出すために、やさしく押弦して下さい。

<4> 6弦開放を弾きつつも、次のハーモニクスのために人差し指を12f上へ移動させます。このハーモニクスによって、前後の流れを断ち切るような気持ちで。

A2

…A1とほとんど同じです

<5> 最後のハーモニクス音を出すために、5弦2fおよび4弦2fを押させている指は3弦開放を弾いたらすぐに放し、12f目指して移動しましょう。

B

…3度目の繰り返しからは音を気持ち強めに

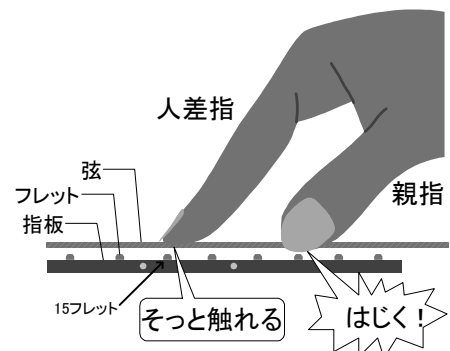
<6> プリングオフを使用したフレーズです。自分の掌に指をくっつけるような気持ちで弦をひっかきます。特に早いフレーズでもないので、プリングを使用せずとも演奏はできます。ただプリングを使った方が滑らかな音になります。ぜひ両者を聴き比べてみてください。

A3

…最後はテクニカルハーモニクスのオンパレードです。

<7> 通常のハーモニクスでは左手をハーモニクスポイント上に軽く触れさせ、右手で弦をはじきます。テクニカルハーモニクスでは右手だけを使って、【弦に触れる、弦を弾く】という動作を行います。この利点は左手が自由になること、開放弦以外のハーモニクス音が出せることです。また自由になった左手でベース音を押さえておけば、ベース音を鳴らしながら、ハーモニクス音も出せます。具体的には人差し指で弦に軽く触れ、親指で弦をはじきます(下図参照)。このパートでは右手はずっと15フレット付近に待機させときます。

<8>最後の5,6弦のハーモニクスは通常のハーモニクスで大丈夫です。というも5,6弦の場合、テクニカルハーモニクス音があまりきれいに出ないのです。ちょっと忙しいかもしれませんが、2弦1fのピッキングが終わった後に左手を移動させてください。



比較的演奏しやすい曲ですが、「親指での押弦」および「ベース音を出しながらのテクニカルハーモニクス」がネックになってくるかもしれません。

テクニカルハーモニクスで大きな音を出すのは難しいですが、なるべく実音との音量差が小さくなるよう工夫してみてください。